

「感動」が過疎集落動かす

大熊 由紀子 国際医療福祉大大学院教授



—中村藍撮影

65歳以上の世帯主の割合が25年後に4割になる、という推計が発表され、暗い予言のように受け取られているなか、超少子高齢化が進む過疎の集落の挑戦が、希望の星として期待を集めています。2月に高知市で開かれたシンポジウム「これからの集落福祉を考えよう」では、全国の過疎集落の実践が参加者を魅了しました。

「陸の孤島」と呼ばれてきた高知県の山奥、津野町床鍋地区の「森の巣箱」でした。ここは人口96人のうち65歳以上が42人で、高齢化率は44%。子どもの姿が消え、廃校になった校舎を取り壊す話が出た。持ち上がった時、中学校のOB仲間が立ち上がり、集落のみんなの知恵をとことん集め、校舎再利用のアイデアを練りました。県庁から地域おこしの「助っ人職員」が常駐して、応援しました。木の香を生かし、2階を宿に、1階を居酒屋とコンビニにしました。朝はここでコーヒーを楽しみ、夜になるとお酒を楽しみます。旅行雑誌で紹介されたところ

くらしの明日

私の社会保障論

「生き字引」お年寄り活躍で活性化

ろ、小学校の自然体験、大学生のゼミ、企業の合宿など年平均8000人が訪れ、1000人が宿泊するようになりました。

高知の人情味豊かな接待や手料理のとりことなり、2度、3度の利用が多いのが特徴です。ここに来たのが縁で結ばれたカップルの結婚式が、3組も執り行われました。

昨年、秋田県湯沢市で開かれた「第1回町内・集落福祉サミット」では、高齢化率4割、人口300人の通称「やねだん」(鹿児島県鹿屋市の柳谷町内会)の報告に、参加者は身を乗り出しました。97年、無償で借りた畑で災

害に強いカライモづくりを始めました。植え付けから収穫まで、主力は高校生、指南役はお年寄りたち。「お年寄りは地域の生き字引」「どんな出番を」が合言葉になりました。

カライモから作った焼酎も名物となり、全世帯に1万円ずつ、ボーナスが出るまでになりました。それまでひっそりと暮らしていたお年寄りが活躍するようになり、顔も知らなかった人同士の気持が通じるようになりました。空き家を修理した「迎賓館」に「アーティストの方、どうぞ」と呼びかけたところ、画家、写真家、陶芸家が全国から集まってきました。

「森の巣箱」には大崎登さん、「やねだん」には豊重哲郎さんという、けん引車となる住民がいます。2人が住民を引っ張ることができた原動力は「情熱」と「感動」。

2人はこどもも言います。「理屈や命令では人はまとまりません」「感動して仲間意識を持った時、みんな喜んで動き出すのです」